

論文(Article)

ことば遊び歌の源流

——江戸時代を中心として——

**The Origin of Play Songs without Gesture
- Centering on the Edo Era -**

大森 隆子
Takako Ōmori*

キーワード：わらべうた、江戸時代、ことば遊び歌の種別化

Key Words : Game Songs, Edo Era, Classification of Play Songs without Gesture

1. ことば遊び歌への視座並びに方法について

筆者は、子どもの世界に伝わるわらべうた遊びに焦点を当てて検証を行ってきた。長く継承されてきた遊びには、子どもたちの心を引きつける要素、すなわち遊びの原点が内在されているのではないかと、探索を重ねてきたのである。資料としては、浅野建二他監修『日本わらべ歌全集 26¹⁾』を用いた。この全集は、明治から昭和前期にかけてのわらべうた事例を、遊戯歌、自然の歌、動植物の歌、歳事歌、ことば遊び歌、子守歌と6分類した上で、都道府県別に紹介したものである。これまでは、主に「かごめかごめ」や「花いちもんめ」といった遊戯歌を対象としてきたが、近稿²⁾でことば遊び歌を取り上げた。遊戯歌が歌詞やメロディー・動作・ルールといった多様な要素から成る熟成した遊び歌と捉えられるのに対し、ことば遊び歌は大よそ言葉と抑揚の二要素から成る素朴な遊戯歌と見て取れる。遊び歌の対象をよりシンプルなものに移すことで、より遊びの原点に近づけるのではと考えたことが理由の一つである。

方法としては、上述の全集の中にことば遊び歌として列挙された1033例を、著者たちが付した分類名称を総合化し、筆者が独自に考案した種別案——はやし言葉歌、遊び言葉歌、目的別言葉歌の3グループ化——に基づいて集約・整理し、歌の特徴や教育的効果について考察を行った。筆者による種別案の詳細は当該論文より該当箇所を引用する。

遊びの事例数の多い順に挙げると、第1は“はやし言葉歌”のグループ(433例)で、種別数は5である。〈からかい歌〉・〈ふざけ(いたずら)歌〉・〈はやし歌〉・〈悪口歌〉・〈けんか遊び歌〉を含む。主として対人関係を基軸にことばの投げ掛けや掛け合いを楽しむものである。第2は、“遊び言葉歌”のグループ(358例)で、種別数は12である。〈数え歌〉・〈尻取り歌〉・〈地口歌〉・〈民話の中の歌〉・

〈替歌〉・〈語り歌〉・〈唱え歌〉・〈さからい歌〉・〈なぞなぞ〉・〈返事もじり〉・〈早口言葉〉・〈ことば遊び〉を含む。いずれも言葉の抽象性・表象性に依拠して言葉そのものを遊びの対象として楽しむものである。第3は“目的別言葉歌”のグループ(237例)で、種別数は7である。〈約束〉・〈まじない〉・〈もの選び〉・〈うらない〉・〈願い(天候・幸せ)〉・〈遊びの中止〉・〈別れ〉を含む。それらは、現実的・直近的な目的や願望を叶えるために、言葉を利用しているものと考えられる³⁾。

このように種別化の視点を導入して考察することにより、ことば遊び歌全体の解明に道を拓いたように思う。

ところで、ことば遊び歌は編者たちにより付記された〈はやし言葉歌〉や〈悪口歌〉等の名称からも明らかなように負のイメージのものを多く含む。この点に関して、研究者たちの間で対応に大きな違いがあった。例えば、町田嘉章・浅野建二編の『わらべうた⁴⁾』の場合、「いわゆる悪口唄のような種々の囃し唄は、音楽・文学の両面からみて、『わらべうた』の第一義とすべきでないという見解から、本書にはこれを割愛した⁵⁾」とあり、囃し唄を中心とすることば遊び歌全般の掲載を見送っている。他方、小泉文夫は『わらべうたの研究⁶⁾』において「でぶでぶ百貫でぶ」、「ばか かばチンドン屋」といった悪口歌をはじめとする多くのことば遊び歌を、わらべうた一覧の第一番目〈となえうた〉に位置づけている。

両者に代表される姿勢の違いは何によるものか。本稿ではそうした問題関心も踏まえ、前述した資料の時代基盤である明治・大正・昭和前期から遡り、江戸時代の資料を検証することとする。この時期の資料考察を通して、現在と今後のことば遊び歌を思考する際の手掛かりを得たい。

2. 江戸前期・中期におけることば遊び歌について

資料としては、江戸時代のわらべうた資料を広範に収集し掲載した『近世童謡童遊集⁷⁾』を基とする。この書については、著者である尾原が凡例で次のように概要を述べている。

出典資料は八十二種百十一点におよび、収載した項目数は約一千、童唄総数千三百余にのぼり、それに楽譜三編を加えた。これにより今まであまり日の目を見なかったわが国の近世における子どもの生活とその豊かな伝承文化、遊びや童言葉や童唄など口承文芸の世界がほぼ視界に入ってくるはずであり、また本全集はじめ地方ごとに収集してきた無数の童唄のほとんどに関連し、それらの歴史的民俗的背景を探るうえで重要な資料となることを充分期待できると思う⁸⁾。

こうした主旨のもと、この資料は第一編 前期資料、第二編 中期資料、第三編 江戸資料〔一〕、第四編 京坂資料、第五編 諸国資料、第六編 尾張資料、第七編 後期資料、第八編 江戸資料〔二〕という構成で著されている。またそれぞれの資料

掲載にあたっては、「各項目には○印をつけ、原本の小見出しはそれを用い、小見出しのない場合や不充分の場合は編者がこれを補い、よりの確でわかりやすくなるようにつとめた⁹⁾」とある。したがって自身のわらべうた論に則って編集・付言した研究書の側面も持つ。

本節では、第一編並びに第二編の検証を行う。第一編の前期資料には『天正狂言本』をはじめ 11 点（1578 年頃から 1686 年の間に刊行）紹介されているが、ことば遊び歌の事例はなかった。

第二編の中期資料には『筆のかす』を筆頭に 15 点（1704 年から 1785 年）収載されおり、内 4 点にことば遊び歌が収録されていた。まず、『筆のかす¹⁰⁾』（1704 年頃）を検討してみる。ここには総数 35 のわらべうた・わらべ言葉が掲載されている。内訳は尾原により、子守歌 4、遊戯歌 12、天体気象の歌 3、動物の歌 7、ことば遊び歌（そしり詞などを含む）10 と分別化されている（内一つは子守歌と天体気象の歌にダブルカウントされているため、延べ数は 36）。尾原がことば遊び歌とした 10 の具体例は以下の通りである。なお〔 〕内は、尾原とは別に筆者が付した名称である。

- 1 地頭どの、鼻の先にあたねば、咎はない。〔からかい言葉〕
- 2 座頭の坊のしりに、九十虫が取ついて、ばい付ばい付するよすろよ。〔はやし言葉〕
- 3 座頭のしりに、しりげが生えて（以下略）。〔はやし言葉〕
- 4 彼の子は何処の子、きびやまのままこ、ついたりはいだり、きびだんご。〔悪口言葉〕
- 5 彼奴が面に、やぐらをたてて、一しめしめて、わいわいわい。〔悪口言葉〕
- 6 歯ぬけ婆すけ、おとがひ七つ。〔悪口言葉〕
- 7 鍛冶屋の職は、きたない職で、（以下略）。〔悪口言葉〕
- 8 エンの下の、ごもくで、きつとつまった。〔悪口言葉〕
- 9 加賀の鏡屋の加右衛門殿かみさまの、かいなの片方を蚊がくうて、痒いさに掻きやつたれば、かいがさにかいなつた。〔地口歌〕
- 10 どつちの髪も長うなれ。〔まじない・痛み止め〕

この 10 例以外に、筆者がことば遊び歌に分類すべきではないかと考えたのは、「烏の真似を、もどいた。」と「こっちの手は金になれ、あつちの身は糞になれ。」の 2 例である。前者について尾原は「烏」と名付けているが、注記に「是は烏の啼く時、小児真似て『カアカア』と云へば、小児の口のはたにできもの出来るとて、云ひ直す詞¹¹⁾」とあって、できもの除けのまじない言葉と捉えられること、後者は「とかげ」と名付けているが、やはり注記に「是は蜥蜴其他毒虫に指しすれば指腐るとて、唾を吐きて此詞を云ふ¹²⁾」とあり、指の腐るのを防ぐまじない言葉と捉えたためである。以上を筆者の種別案に照らせば、〔悪口言葉〕を中心とした「はやし言葉歌」が 8、〔地口歌〕の「遊び言葉歌」が 1、〔まじない〕の「目的別言葉歌」が 3 となる。

この他『落ち葉集』（1704 年）には、1 例、言葉遊び歌「くんぐり戸」、〔地口歌〕が

紹介されている。これは「くんぐり」という韻の繰り返しを楽しむものである。以下に紹介する。

背戸は八重垣大戸の枢のくんぐり戸、くんぐりくんぐりくんぐりくんぐり、なんば潜りくんぐり潜り良ひくんぐり戸、くんぐりくんぐりくんぐりくんぐり、潜りくんぐり潜つて、段々目出たいご祝儀¹³⁾。

『夏山雑談』（1741年）には「雷鳴の時桑原ということ」がある。以下添え文を紹介すると、

桑原といふ所は、むかし菅家のしろしめしたる処なり。延長の霹靂、其後度々雷の墮たりし時、此桑原には一度もおちず、雷の災のなかりしとかや。これによって京中の女子、いかづちの鳴時は、桑原々々といひて、呪しけるとなり。今にいたりてかくいふ事なり¹⁴⁾。

とあり、雷除けの「まじない」であることが分かる。これは現在でも継承されていることは承知の事実である。

『撈海一得』（1771年）には「かいるどのお死にやった」があり、以下のように説明されている。

かいるどの、おしにやった、おんばくどの、おんとむらい。

ト、斉 声 撃 壊 テ是ヲ呪ス。須臾ニシテ死蝦蟇蹶然跳躍ス¹⁵⁾。

すなわち、死した蛙を生き返らす「まじない」の言葉である。

中期資料全体をまとめてみると、“はやし言葉歌”が8、“遊び言葉歌”が2、“目的別言葉歌”が5となる。“はやし言葉歌”の内容をみると、地頭、座頭、鍛冶屋など大人たちを対象としたものが多い。子どもと大人の境界が分離していなかった生活実態の証左とも考えられる。また、「まじない」の言葉例には、「かいるどの、おしにやった（以下略）」のように、大正・昭和まで引き継がれたものが見受けられる。

3. 江戸資料 [一] におけることば遊び歌について

第三編江戸資料 [一] に収載されている11点の資料（1792年から1846年）中、8点にことば遊び歌が収録されていた。順次押さえていく。『四方のあか』（1787年）には、「児戯賦」として41例の児戯や童謡が紹介されているが、内1例が該当する。それは「べろべろの神」で、尾原の注記が以下のように付されている。

オナラの主を見付けるなどの時、小枝や竹・紙繕りなどの先を折り曲げ「べろべろの神は正直な神よ」などと歌いながら回し、歌の終わりに止めて当たった者とする¹⁶⁾。

すなわち、「うらない」である。

『諺苑』（1797年）には、58例中1例が言葉遊び（原書には「児女の戯言」と付記）として掲載されている。それは「橋の下の子蒲ハ、（以下略）¹⁷⁾」である。しかしこの他に、筆者は10例を該当例として抽出した。その内訳は「まじない」が「チチン

プイプイ御世ノ御宝」(痛み止め),「痺京へ上レ」(しびれ止め)など6例,「はやし言葉」が「女ノ中ノマメイリ」など3例,「言葉遊び歌」が「チウジチウジ, タコノクハイガ, 十チャウ」(数え歌)の1例である。『浮世風呂』(1809年~1813年)には,「油証文」という「約束・誓い」,「おいらア内イ帰へろ」という「別れ」,「矢はぺんべこぼんぽこ」という「早口言葉」が各1ずつ紹介¹⁸⁾されている。

『童謡集』(1820年)には,「みつかりこ」という「何かを探すときの唄¹⁹⁾」がある。『甲子夜話続篇』(江戸後期成)には,唱歌と答歌の掛け合いの例が紹介されている。

唱歌と謂ふは,「孟孟孟は今日明日ばかり, 翌日はよめのしほれ草, しほれ草」

これ唱歌なり。答哥とは,「しほれた草をやぐらに上て, 下から見ればほけの花,

ほけの花」是れ答歌なり。(以下略)²⁰⁾

こうした歌の掛け合いは女子特有の遊びともいわれ,「此時の風俗は, 市中女兒の群行さへも正しきことにして, 戦国余波尚存し, 義勇の気かかる婦女子のうへにも見へたり²¹⁾」とあるように, 隊列を成して歩く女兒たちの唱え言葉で, 遭遇した集団との間にやり取りを交わしたとある。

『幼稚遊昔雛形』(1884年)には, 75種の童戯・童謡が紹介されている。その内, 該当する例としては,「あかんべい」,「ほうやろほうやろ」,「おとこと女とまアめいりいつてもいつてもなまぐせ」,「ひとまねこまね」といった「はやし言葉」が4例,「ちう, ちう, たこ, かい, な(二つずつ数える)」,「はまぐりは, むしのどく(一つずつ数える)」という「数え歌」が2例,「しょつしょつのかみはかれにやろ」という「物遊び」,「ちちんぷいぷい, ごよのおんたから」という「まじない・痛み止め」,「ゆびきり かまきり」という「約束」,「かいろがなくから, おらうちへかえろ」という「別れ」,「てりてり坊主」という「願い・雨止み」などが各1例ずつ計5例みられる。

全体を通して,「はやし言葉歌」が7,「遊び言葉歌」が6,「目的別言葉歌」が15である。これらのことは遊び歌例から, この時期子等の間に仲間集団が確立し, 集団での外遊びが盛んになったことが分かる。例えば,「みつかりこ」,「おとこと女のまアめいり」,「かいろがなくから, おらうちへかえろ」などはその適例である。また「あかんべい」や「ちちんぷいぷい」など, 現在にも引き継がれているものが多くみられる。

4. 地域資料におけることば遊び歌について

地域資料としては, 第四編に京坂資料が, 第五編に諸国資料が, 第六編には尾張資料が収載されている。年代的には, 1729年頃から1840年頃までに刊行されたものである。まず京坂資料には, 12点中, 3点にことば遊び歌が収録されていた。『翁草』(1772年)には,「洛中堅小路」と「同横小路」という二つの「通り名歌」がある。これは, 尾原の解説によれば,

碁盤の目のように東西南北に走る京都の街路の名前を, 幼童にも覚えやすく語

調のよい歌の文句に仕立てたもの。それぞれの通りの名前の頭音をつないで早口言葉のように唱えさせるが、次第に節付けされ童謡化した²²⁾。

とあり、“遊び言葉歌”に属すると考えられる。これは、『日本わらべうた全集 15 京都のわらべ歌』に掲載されている「丸竹夷二 押 御池 姉（以下略）²³⁾」という京の通りの名を読み込んだ歌の源流と推測される。

『弦曲粹弁当』（1774 年～1783 年）には、「天王寺のとうとう念仏」という“遊び言葉歌”が、『皇都午睡』（江戸後期）には、「地蔵の権化 稲荷様に十二銅」という唱え言葉が紹介されている。後者は、「地蔵の権化、米ちとたんせ。と近所の門門にたちこめを乞ふ。（中略）稲荷様に十二銅をおあげ。と、子供口口に云て門門に立、賽銭をとらす時には『珍重珍重』と云、とらせぬ内には『貧乏やアイ』と声高に云て帰る²⁴⁾」といった台詞にある「悪口」を通して当時の世相が見て取れる。

次に諸国資料については、29 点中、2 点にことば遊び歌が収録されていた。まず『弄鳩秘抄』（1804 年～1824 年、常陸水戸辺）には、「蛇をさくる歌」、「燈花の歌（丁子頭）」（「燈心の燃えさしの先端にできる黒いかたまり。形が丁子の実に似ているところからいう。俗にこれを油の中に入れると、財貨を得るといい、吉兆とした²⁵⁾」）、「蛙の歌」（蛙を生き返らせる歌）の 3 例が「まじない」として、「鶴の歌」が「早口言葉」、「ちかいの歌」が「約束」として挙げられている。

『諸国風俗問状答書』（1814 年～1830 年、各藩より収集）には、陸奥国白川領答書に「あすは照るか、降るか²⁶⁾」という「まじない」がある。

第六編の尾張資料には、4 点中、1 点にことば遊び歌が収録されていた。それは『尾張童謡集』（1831 年、尾張地方）で、“遊び言葉歌”に属する例が 7 掲載されていた。内訳は、「むかへのひへのこ、むせたらもてこい²⁷⁾。」という「早口言葉」が 1、「やかんかむこのへ²⁸⁾」などの「下から言う詞」が 5 である。

全体を通して、“はやし言葉歌”に属するものは無く、“遊び言葉歌”に属するのが「早口言葉」1 と「下から言う詞」5 の計 6、“目的別言葉歌”に属するものが、「まじない」4、「約束」1、「うらない」1 の計 6 で、合わせて 12 例抽出された。特徴としては、教育的側面を持つ「早口言葉」や「下から言う詞」といった新しい形の“遊び言葉歌”事例が見受けられる。

5. 後期資料におけることば遊び歌について

年代的には、1813 年の『骨董集』上を始めとし、1859 年から 1869 年頃に成ったと言われる『於路加於比』までの 11 点の資料が該当する。その中で、2 点にことば遊び歌の例が挙げられていた。まず、『喜遊笑覧』（1830 年）には、「四方白壁（行燈）」という「なぞなぞ」が、以下のように紹介されている。

『宝蔵』〔三〕ふるき女のなぞなぞにも、四方しらかべ中ちよろちよろ、などこそいひつれ云云。寛文中にふるきとあるは、此あんどこの謎は久しくいひ伝へた

るにや²⁹⁾。

他に、「きさごはじきの詞」として「きさごをかぞふるに、ちうじちうじたこのくはへが十てう³⁰⁾。」という〔数え歌〕、「鼬みめよし猫の貌は杓子」や「かへる殿お死にやった、おんばく殿の御とむらひ。」という〔まじない〕がある。前者については、「鼬の声を聞くと火事にあい、凶事があるという迷信があり、その時この呪文を唱えると災いから免れるという³¹⁾」説明が付記されている。後者は先述例と同じ。

このように、“遊び言葉歌”に属する〔なぞなぞ〕、〔数え歌〕が各1の計2，“目的別言葉歌”に属する〔まじない〕が2抽出された。ここで登場する〔なぞなぞ〕や〔数え歌〕からは、大人が子どもたちを遊んでやり、また教え導いている様子が彷彿とされる。

6. 江戸資料〔二〕におけることば遊び歌について

幕末期の江戸を対象とした資料だが、書物の刊行年としては1885年の『古今百風吾妻の余波』、1894年の『あづま流行時代子供うた』、1905年の『江戸府内絵本風俗往来』、1919年の『山の手の童謡』の4点と、いずれも明治・大正時代に入ってからである。この中で、2点の書に該当事例が収載されていた。順に検討を行う。

第一の書である『あづま流行時代子供うた』(1894年)の目録には手毬唄、羽子突唄、手玉唄、盆盆唄、子守唄、月夜唄、種々遊び唄、種々遊言葉、間違易き語、狎ワン、尾とりとあり、分類項目に基づいて資料が紹介されている。この項目中、本稿の対象となるのは、種々遊び言葉、間違易き語、尾とりと考えられる。初めの種々遊び言葉は、その前に置かれた種々言葉唄が「籠目籠目」や「通りゃんせ」といった定型の遊びに伴った唄であるのに対し、この項目の事例は実態としての遊びがなく、言葉の投げ掛けややり取りを楽しむものを指し、間違易き語とあるのはいわゆる早口言葉を言う。また、尾とりは尻取りのことである。項目数から見ても分かるように、該当事例が多いことから、全体を集約して捉えることとする。

まず“はやし言葉歌”に属すると考えられる〔悪口唄〕や〔からかい歌〕の例が、「人真似こまね」、「女と男と豆煎り」、「おしやれしやれても惚人が無い」、「おヲ竹さんても返事が無い」、「女に構ふいイくじなし男」、「告ひ付けぐちはアリ口」、「今啼た鳥がもヲ笑つた」、「可惜女が荷を背負た」、「おまへに惚れた蓬蓮草」、「大きな赤ン坊、飴買てしやぶれ」、「泣虫毛虫、挟んで捨ろ」、「自家の前じやァ蛤ッ貝、外へ出ちやァ蜆貝」、「目玉、ひよつくり玉、提灯玉、屁玉」、「坊主坊主やま藷、山ン中で屁を放れた」、「天に一つ足元に一つ、紺屋の隣家にまだ一つ」(物を隠してぢらす時)、「大きなお世話、お茶でも上げれ」(人から好ぬことをされた時)、「取たら見イしいな、以下略」(手の届かぬ所へ物を揚げて)、「ゑんがやゑんが、ゑんがの性や」(汚いことを仕た子に)、「地平が痛って泣てるやイ」(石の投げ合いで、届かなかった時)、「ヲツト、突かい棒」(脇を向いてゐる子の頬へ指を当がひ呼で)、「お前の天窓に芥が付て

ある」(何も付いていないのに),「見たら木兎, 飛だら鳶」(欺して背を見させ),「客ン坊の柿の核」(呉れない時),「赤ン弁慶, 屁でもかげきよ」(嫌なことを言われた時)の24あった。この他, 子の名に寄せるものが,「柴ほこどツちやん鉦たたき, 一日叩て一文貰ひ。」など6である。したがって計30例である。

次に“目的別言葉歌”に属する例として, [別れ] に当たるものが,「お土産三ツにお皿が三ツ。」「あばよ, しばよ, 金杉よ。」「蛙が啼くから宅へ帰イイろ。」の3, [まじない・痛み止め] として「ちちんぷいぷい御世のおん宝。」の1があった。計4例である。

“遊び言葉歌”に属するものとして, [数え歌] が「ちう, ちう, 蛸, かい, な。」「は, ま, ぐ, り, ハ, 子, ど, も, に, ハ, む, し, の, ど, く。」の2例, [頭韻を踏む] ものが3例, [早口言葉] が「隣家の客ハ能く柿を食ふ客だ。」「鴨が米嚙ァ小鴨が小米かむ」など13例, [しりとりの文句] が「牡丹に唐獅子竹に虎, (以下略)」の1例みられた。この他 [返事もじり] が,「あいハ紺屋のもん所」(人があいと返辞をした時) など17あった。計34例である。

第二の『山の手童謡』(1919年)は, 大正8年に刊行されており, 比較的近年の書である。ここには“はやし言葉歌”に属する[からかい歌] が「ジャンコジャンコ, 火事はどこだ³²⁾」(疱瘡顔の者に) など5, “言葉遊び歌”が[返事もじり] の1, “目的別言葉歌”に属するものは, [別れ] である「かいるが鳴くから, モーうちへかいる」の1, [約束] である「指きりかまきりこれっきり³³⁾。」の1, 計2例みられた。

全体を通してみると, “はやし言葉歌”が35, “遊び言葉歌”が35, “目的別言葉歌”が6であった。全体の特徴として, ことば遊び歌の種類・事例数共に飛躍的に増加したことが挙げられる。資料収集が進んだこととともに, 子どもたちの遊びの世界が一段と広がり, また充実していったことが事例の一つひとつの言葉を通して見て取れる。特に“はやし言葉歌”と“遊び言葉歌”の急増は, 仲間関係の濃密さや知恵を凝らして遊びを豊かにしようとする子どもたちの創造性の表れと理解していいのではないだろうか。

7. まとめに代えて

江戸時代全体, 約300年余に渡ることば遊び歌事例を筆者の種別化案に基づいて検討を行った。本書の構成にしたがって例数をまとめたものを示す(表1)。その結果, 第一に“はやし言葉歌”に関しては例数が幕末期に急増すること, また収集状況に明らかな偏りがみられることの2点が特徴である。前者は子どもが群れて遊ぶことに同伴した現象と推測することができる。後者は資料刊行者の価値観の表れのように思う。本稿の冒頭でも述べたように, 現代の研究者たちにもこの分野の歌の収録採否については相反する見解があった。江戸時代においてもその評価は割れていたであろう。そのことにより, 極端な例数の表れ具合に繋がったとみてはどうだろう。第二に

“遊び言葉歌”については中期・後期ともに事例数が少なく、幕末期以降に急増する。この分野は、大人の助力が必要で、おそらくこの時期になってようやく子どもの相手ができる余裕が生まれたこと、また寺子屋等の普及により子等の教育レベルが向上したことなどが関係していると思われる。第三に“目的別言葉歌”は前述の二つに比べ、江戸中期に比較的多く採集されている。中でも「まじない」言葉は相当古くからあることが分かった。

表1 江戸時代の資料における「ことば遊び歌」の種別分布の表。

種別・項目 期・地域別項目	はやし言葉歌	遊び言葉歌	目的別言葉歌	合計
江戸前期	0	0	0	0
江戸中期	8	2	5	15
江戸 [一]	7	6	15	28
諸国	0	6	6	12
江戸後期	0	2	2	4
江戸 [二]	35	35	6	76
合計	50	51	34	135

具体例の多くは、明治・大正・昭和の前期にかけて、またその内の幾つかは今日に至るまで継承されていることが明確になった。書承でなく、また身体的感覚でもなく、口承によって何百年もの間引き継がれるという実体の奥にあるものは何か。そこに遊びの原点が存在するのだろうか。

ともかくにもことば遊び歌の検討を通して明らかになったことは、子どもの遊び生活の広がりや充実度合が歌の発展と相関しているということである。江戸末から明治・大正・昭和前期にかけてわらべうたが発展している実情を踏まえると、改めて現在の衰退状況を正視し、詳細な調査の上で原因について検証することが求められよう。また、ことば遊び歌が担う機能（コミュニケーション力の養成、語彙力・知力・思考力、行動調整力など）の分析や子どもの育ちとの関係を探求することも必要であろう。今後資料の発掘を重ね、さらに信憑性の高い結論を導くとともに、わらべうた全体におけることば遊びうたの位置づけも構想してゆきたい。

■注

- 1) 浅野建二他監修『日本わらべ歌全集 26』柳原書店、1979 年から順次刊行。
- 2) 大森隆子「伝承遊び研究考(6)——ことば遊び歌を中心に——」(椋山女学園大学研究論集) 第 44 号人文科学篇 2013 年 3 月所収。
- 3) 同上、p 4。
- 4) 町田嘉章・浅野建二編『わらべうた』岩波書店、1962 年。
- 5) 同上、pp 278～279。
- 6) 小泉文夫編『わらべうたの研究』稲葉印刷所、1969 年。

- 7) 尾原昭夫『近世童謡童遊集』柳原書店, 1991 年。
- 8) 同上, p 1。
- 9) 同上。
- 10) 野間義学著『筆のかす』(宝永元年頃成)は尾原昭夫により発掘された資料。解説(同上, p 14)参照のこと。
- 11) 同上, pp 20~21。
- 12) 同上, p 21。
- 13) 同上, pp 23~24。
- 14) 同上, p 36。
- 15) 同上, p 38。
- 16) 同上, p 44。
- 17) 同上, p 4。
- 18) 同上, pp 51~52。
- 19) 同上, p 60。
- 20) 同上, p 65。
- 21) 同上, p 66。
- 22) 同上, pp 129~130。
- 23) 同上, pp 139。
- 24) 同上, p 159。
- 25) 同上, p 165。
- 26) 同上, p 180。
- 27) 同上, p 272。
- 28) 同上。
- 29) 同上, p 284。
- 30) 同上, pp 290~291。
- 31) 同上, p 294。
- 32) 同上, p 359。
- 33) 同上。